

多治見



多治見は「陶都」と呼ばれ 東濃一帯の陶磁器の産地である 多治見を中心として焼かれる美濃焼は全国生産高の3割強を占め 多治見はその30%を生産する 美濃焼は江戸初期 少数の窯株の所有者だけが農閑期に生産していただけで 幕末には尾張藩の「国産」として市場に出ていたが生産力には限界があったそれが飛躍的に伸びたのは明治33年に中央本線が名古屋から当地まで開通してからである 明治末期から大正初期には機械化が進み 登り窯は石炭窯に代わり戦後は重油および電力焼成のトンネル窯が多くなった 陶磁器の製造工場(カッコ内生産種目)は多治見地区(タイル類) 滝呂地区(和洋飲食器) 高田地区(とっくり 花器) 市之倉地区(坏 茶碗)に分布している 最近はタイル類の輸出伸長に伴ってその生産が活発で 和洋飲食器を遙かに引き離している 鉄道および道路の発達にも恵まれ東濃地方の産業・経済・文化の中心地でもありまた観光都市としても脚光を浴びている 56年4月1日現在人口75,323人

多治見は無尽蔵に近い良質の陶土に恵まれ 志野・瀬戸黒・黄瀬戸・織部など数々の名陶を生み出した 現代は荒川豊蔵氏を生んだ 写真は 大正末期の滝呂に至る尾張坂の道端窯

